

## マタイによる福音書7章24-29節 「岩の上に建てた家」

### 1A 岩の上の家 24-25

1B 御言葉を聞いて、行う者 24

2B 深く掘り下げる人 ルカ6:46-49

1C 経験に頼る信仰

2C 岩なるキリスト

3B 洪水 25

### 2A 砂の上の家 26-27

1B 聞いて、行わない者 26

1C 見た目が同じ家

2C 愚かさ

2B 倒壊 27

### 3A 驚く群衆 28-29

1B 行いを強調するが、行いが伴わない教え 28

2B 権威のある教え 29

## 本文

マタイによる福音書7章を開いてください、私たちの「山上の垂訓」のシリーズが、最終回を迎えました。「**24** ですから、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人にとえることができます。25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。岩の上に土台が据えられていたからです。26 また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にとえることができます。27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした。」28 イエスがこれらのことばを語り終わると、群衆はその教えに驚いた。29 イエスが、彼らの律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えられたからである。」

イエス様が、最後に聞いている人々に呼びかけを行っておられました。狭い門から入りなさい、ということ。偽預言者たちに用心なさい、ということ。そして最後に、「**わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う者はみな**」と続きます。けれども、これらのことばというには、直前のこれらの呼びかけだけでなく、主が山の上で語られたすべての言葉を含んで言われていると思います。これまでの説教をしめくくるのです。それが、「**わたしのこれらのことばを聞いて、それを行う**」ということであり、このように、「**権威ある者として教えられた**」ということなのです。

## 1A 岩の上の家 24-25

### 1B 御言葉を聞いて、行う者 24

ずっと聞いている人々にある危険は、「良い話を聞きました」ということで終わってしまうことです。聞くのは好きだけれども、それを自分のものとして考えて、今の具体的な生活にまで落とすまでする人は、まれになります。四つの種類の土に種を蒔いた喩えでも、聞いてはいるけれども、表面的に喜んでいてだけで、深みがないのですぐに芽が枯れてしまう、岩地に蒔かれた種があります。また、聞いて実践しようとはしますが、今までの自分の生活に支障が来るのではないかと懸念することが来ると、結局自分の生活を優先させてしまう、つまり、いばらのある土に種がまかれるときです。実を結ぶのは、「ルカ 8:15 立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」とする、良い土地のみです。聞いているだけですと、それで、自分は大丈夫だという錯覚を与えます。そのことに対する警告を主は語られています。

エゼキエルという預言者は、いろいろな人が、彼の語ることを聞きたいとしてやってきた経験があります。バビロン捕囚が起りました。彼はこれから語る口が開かれましたが、そこに来る人々は、その語られたことを行なおうと思わずにやってくることを、主は彼に伝えました。「33:30-32 人の子よ。あなたの民の者たちは城壁のそばや家々の戸口で、あなたについてこう語り合っている。『さあ、どんなことばが主から出るか聞きに行こう。』<sup>31</sup> 彼らは群れをなしてあなたのもとにやって来る。そして、わたしの民はあなたの前に座り、あなたのことばを聞く。しかし、それを実行しようとはしない。彼らは口で甘いことばを語り、心で利得を追っている。<sup>32</sup> あなたは彼らにとっては、音楽に合わせて美しく歌う恋の歌のようだ。彼らはあなたのことばを聞くが、それを実行しようとはしない。」口では、良いことを語っていますが、心では異なることを考えている。それなので、聞いているけれども、きれいな歌を聞いているように聞いていて、それを実行しようとはしないということなのです。

ここで間違っはいけないのは、「聞くこと」と「行う」ことは、本来、一つなのだということです。我が身のこととして聞いているのであれば、確かに、主の語られることは神のことばであり、権威あるものだと知っていれば、聞いたら、主を恐れてそれを行わないといけないと思います。聞いたら、行うような聞き方です。聞いても、行なわないのなら、そもそも、その聞いているということが、神から聞いていると信じていないからです。信仰は聞くことによるのですが、信じて聞いたら、そこに行いが伴います。

主のことばを聞いて、保つことを、主は黙示録で教えておられます。「1:3 この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。時が近づいているからである。」そしてヤコブは、手紙でこう教えています。「1:22 みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。」

## 2B 深く掘り下げる人 ルカ 6:46-49

そして、聞いて行う者は、「**岩の上に自分の家を建てた賢い人にたとえることができます**」とされています。岩の上に家を建てることと、砂の上に家を建てることを対比させています。岩の上に建てるとは、どういうことか？ルカによる福音書で、イエス様は、もう少し詳しく、岩の上に建てることを説明しておられます。「6:48 その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。」ここで大事なものは「土台」です。建物はいくらでも大きく、見栄えもよくすることができます。けれども、土台が堅固なものに支えられてこそ、洪水が押し寄せても倒れることはありません。

## 1C 経験に頼る信仰

そこで、私たちが吟味しなければならないのは、自分が何を土台にしているのかを確かめることです。自分が行っていることは、いつもと変わらないかもしれませんが。毎日の生活、また信仰生活や教会生活もいつもとは変わらないかもしれない。ところが、いつの間にかその土台がすり替わっているかもしれません。自分が教会に来ることができているから、それで自分は大丈夫だと安心させてしまっていることがあるかもしれません。しかし、教会に来ることは強調しすぎることはないほど大事なことですが、しかし、それが土台ではないのです。

自分が救われていると感じていることも、土台にはなりません。感じていることは、いくらでも変わるのです。自分がどう感じるかにより頼っていると、感じられなくなった時に倒れてしまいます。自分が感じなくとも、それでもなおのこと主のところに来る必要があります。また、過去の経験も頼りになりません。自分はこのような、素晴らしい体験をしてイエス様を信じましたと言っても、その体験が過去のものとなり、今の自分がそのような活き活きとしたものにはなっていないと感じて、それで信仰がどこかに行ってしまった、ということになりかねません。そして、知識も土台にはならないのです。自分が知識を得ることを目的にしてしまうと、自分を高ぶらせますが、愛は育ちません。知識によって、かえって主への信仰の妨げになることさえあります。自分の知識では到底、理解できないことが行ったら、そこで信仰がなくなってしまう、ということになります。

## 2C 岩なるキリスト

ここで、イエス様は「**岩の上に土台を据えて**」とされます。岩は堅固です。揺らぐことはありません。この岩とは、キリストご自身のことです。聖書には、主なる神が岩であることが数多く書かれています。「Ⅱサム 22:2-3【主】よ、わが巖、わが砦、わが救い主よ、身を避ける、わが岩なる神よ。わが盾、わが救いの角、わがやぐら、わが逃れ場、わが救い主、あなたは私を暴虐から救われます。」主こそが岩であります。そしてペテロに対して、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。」と言われました(マタ 16:18)。この岩とは、イエスが、生ける神の御子キリストだという告白です。そして、パウロは、コリント第一で、モーセの打った岩はキリストを指していることを話しています。「10:4 みな、同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らについて来た霊的な岩から飲んだの

です。その岩とはキリストです。」ですから、私たちの信仰のよりどころは、キリストご自身です。キリストとの関係です。この方との命ある関係です。

「地面を深く掘り下げ」という言葉がありますね、ここも大事です。深く掘り下げることによって、ようやく岩にたどり着きます。柱を立てるのに掘り下げはするけれども、岩にまで到達していないということがあるのではないのでしょうか？つまり、イエス様を主とする深い関係にまで到達していないのです。この方についてのことは、たくさん聞かかもしれませんが、この方の名で祈るかもしれません。けれども、日々の祈りの生活で、自分がしたいことがあったり、自分の考えていることがあっても、主が語られたという理由だけで、「はい、分かりました。」と静まって、頷く時を持っているか？どうかであります。そんな時、「主よ、そんなことはできません。」と反発してしまうかもしれません。それでも、主が言われているのですから、お言葉ですから、ということで、その言われた通り行なうという関係です。そうした、普段は目に見えない部分、イエス様と親しく交わっている部分が、ここでいう地面を深く掘り下げて、岩の上に土台を据えるということでもあります。

### 3B 洪水 25

そして、「25 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家を襲っても、家は倒れませんでした。」とされています。

洪水ということから、試練、自分たちの力では抗うことのできないもの、というものを想像するのでしょうか。普段であれば、自分で何とかやりくりできることがあっても、洪水が来れば、そういった小手先のことはすべて通用しません。押し流されてしまいます。

ところで、旧約聖書では、軍隊が一斉に攻めてくる時に、洪水という表現が使われます。例えばダニエル 9 章では、軍隊が次々と攻めてくることを洪水に喩えています。「9:26 その終わりには洪水が伴い、戦いの終わりまで荒廃が定められている。」他にも、詩篇 46 篇にこのような有名な言葉があります。「1-6 節 神はわれらの避け所、また力。苦しむとき、そこにある助け。それゆえ、われらは恐れない。たとい、地は変わり山々が海のまなかに移ろうとも。たとい、その水が立ち騒ぎ、あわだっても、その水かさが増して山々が揺れ動いても。セラ川がある。その流れは、いと高き方の聖なる住まい、神の都を喜ばせる。神はそのまなかにいまし、その都はゆるがない。神は夜明け前にこれを助けられる。国々は立ち騒ぎ、諸方の王国は揺らいだ。神が御声を発せられると、地は溶けた。」ここを読んで、9 年前の津波の被害の時には慰めを受けたものです。けれども、詩篇の背景は、これは、ヒゼキヤがユダの王であったとき、アッシリア軍がエルサレムを取り囲んだことが背景になっています。水かさが増していく様子は、アッシリアがエルサレムを一気に取り囲んだ様子をも映し出しています。けれども、エルサレムはそれによって揺るぐことはありません。なぜなら、そこに神がおられるからだ、ということです。

これを聞いているユダヤ人は、紀元後 30 年辺りにいます。その約四十年後、エルサレムをローマに取り囲まれることになります。その時に、ユダヤ人は二手に分かれました。多くが、大多数が、ローマによって殺され、捕虜とされていきました。しかし少数のグループが、一人も死なずに免れました。イエスの御言葉を聞いて、ユダヤから出ていきなさいと言われた言葉を持っていたからです。ユダヤ人の信者たちは、主がかつて言われたことを固く心に留めていて、ローマが包囲を一時解除した時に、エルサレムから逃げて、ペラというデカポリスの町に難を免れたのです。岩の上に家を建てていたのです。

私たちは、いろいろな洪水を通ります。人生の嵐が襲いかかります。自分たちではどうしようもならないことが起こります。その時、落胆を経験します、失敗を経験します。悲しみも経験し、悲劇も襲います。そういった洪水のような時に、自分が何を支えにしているのかが、如実に明らかにされるのです。キリストを土台にしていたのか、他のものを土台にしていたのか明らかにされます。

## 2A 砂の上の家 26-27

### 1B 聞いて、行わない者 26

「26 また、わたしのこれらのことばを聞いて、それを行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人にたとえることができます。」

### 1C 見た目が同じ家

砂の上に建てる家です。イエス様の言葉を聞いて、それを行っていない人なのですが、洪水さえ起こっていなければ、全く同じ家を建てているところが大事です。見た目は、他と変わらないのです。イエス様が、偽預言者について、「7:15 羊の衣を着てあなたがたのところに来る」と言われましたが、他の羊と変わりなく動いているということです。ですから、先ほど説明したように、ここでイエス様が、単に、聞くだけでなく行いなさいという勧めをしておられるのではない、ということです。外の行いにおいては、欺くことができるのです。

イエス様のことばを聞いていますから、知識としては持っています。ですから、他の信者と同じように語れますし、同じように祈ることができます。そして、パリサイ人や律法学者のことを思い出せますか、彼らは施しに熱心であったし、祈りも、断食もよく行いました。ですから、ますます、家としてはしっかり建てていたのです。ですから、私たちがいかに、上辺で判断してはいけないことを教えられますね。「この人はきちんとしているに違いない。」と思って、それが何を根拠にしているでしょうか？多くの場合は、表向きの敬虔であります。見える限りにおける霊的な姿です。イスカリオテのユダのことは見てください。あれだけイエス様の近くにおいて、財務係まで行い、どの弟子もまさかイスカリオテのユダだとは思いませんでした。ですから、私たちがいかに、「本質は見えないところにある」ということに気づかないといけませんね。



それゆえ、私たちは、主に言われたことをそのまま行うという営みを行っていかない、イエス様に根ざしていない、そういったことを隠したまま家を建てていく、つまりクリスチャン生活を形成していくことができずしてしまいます。それが恐ろしいことです。それで、そうならないようにイエス様が警告をしてくださっています。

## 2C 愚かさ

イエス様は、彼のことを「**愚かな人**」と言われていましたね。家の柱を岩のところ掘ったところに入れる、ということをするのが賢い人ですが、そうしないで、手前の砂の部分で柱を建てるのが愚かなのですが、なぜそうしてしまうのでしょうか？一つに、拙速になっているということがあるでしょう。柱が岩にまで達していないのに、それでも家を建て始めてしまう拙速さです。これが愚かです。私たちの霊的な歩みで、イエス様に留まること、イエス様の言葉に留まることが大事なのに、そこをすっ飛ばして、他の人の目に見えることをやっていく。自分にある問題に取り組むことをせず、そこを隠しながら表向きは何かをやっていこうとする。こういった拙速さは、愚かです。霊的成長は、忍耐のいる作業です。自分自身が成長が遅いと感じることがあります。また同じことを繰り返してしまっただけです。けれどもあきらめずに、主の恵みで付き合うのです。

それから、愚かさは「洪水になった時にどうするのか？」ということ想定しません。最悪を想定しません。こうなったらどうなるのか？ということをもっと考えて、そして用意するのです。「岩の中に柱を打ち込んでいなければ、洪水や地震が起こった時に倒れてしまうかもしれない。」と思うはずで、「ルカ 14:28 あなたがたのうちに、塔を建てようとするとき、まず座って、完成させるのに十分な金があるかどうか、費用を計算しない人がいるでしょうか。」と主は言われました。前もって考えて、その上で今、どうすればよいのか備えるのです。それから、他者の助言を賢い人は受けるでしょう。愛する兄弟からの叱責さえも受け取ります。自分自身が勝手に判断するのではなく、はたしてこれが主の御心なのかどうかを確かめるために、他の尊敬できるクリスチャンにも、助言を仰ぎます。

## 2B 倒壊 27

「**27 雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもその倒れ方はひどいものでした。**」倒れてしまった姿はひどいものです。これまで、あれだけ美しさを装っていた家が、洪水で一気に瓦礫へと化してしまいます。私たちの霊的な家も、土台がなければ、ある出来事をきっかけにして、一気に倒れてしまうことさえあります。パウロがコリントの人たちに警告しました、「**I コリ 10:12 立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。**」立っていると思う者は、と言って、立っている者は、とは言っていません。自分をとかく欺いてしまうものです。

### 3A 驚く群衆 28-29

「28 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。29 イエスが、彼らの律法学者たちのようにではなく、権威ある者として教えられたからである。」

#### 1B 行いを強調するが、行いが伴わない教え 28

群衆が、イエス様の教えに驚いています。それが、一つに「**律法学者たちのようにではなく**」ということでもあります。律法学者たちは、外側の行いについての正しさを要求しました。しかし、ここでの「行い」というのは、砂の上の家のようなものであり、人の目に見えるところにある行いではありません。実は、彼らは行いを強調しながら、実は行いが伴わない教えを垂れていたのです。矛盾していますが、外側の行いを教えていましたが、**真実な行い、実を結ばせるものは、あくまでも内の態度、心の一新によって初めてもたらされます。**言い換えれば、信じて、行うという、信じることと、行うことの区別ができないものであります。イエス様は、初めに心の貧しい者は幸いです、と宣言されて、私たちの内に良きものが何一つないことを悟らせ、それから律法の行いの義ではなく、神の下さるキリストからくる義、信仰による義なのだということです。

#### 2B 権威のある教え 29

次に、「**権威ある者として教えられた**」ということですが。律法学者は、「ラビのガブリエルによれば」といって、律法を絶えず、他の律法学者やラビからの引用で教えていました。しかし、イエス様は、「あたしは、あなたがたに言います」と言われました。なぜなら、イエス様は、神ご自身のことばをそのまま語られていたからです。そこには、力があります。だから、数々の奇蹟も、言葉の命令によって行われました。中風の者を、「立ち上がりなさい」と言われたら、立ち上がりました。言葉に権威があり、その権威に従うのです。

このようにして、私たちはイエス様の教えを聞き、そして、それによって具体的に御国の生活をすることができるようにされています。私たちの中間に、交わりに、どれほどのイエス様の特徴が、子の説教で書かれている特徴があるかどうか？ですね。